

かわさきFM 晴れるYA!GOLD!!

ラジオドラマ 『天空のキャンペラ』 台本

作・演出 春田鮎



登場人物

- 鐘白 まどか：大日本航空のCA
- 円堂 令奈：後輩のCA
- 澄野 大吾：パイロット 当機の操縦士
- 西沖 藍子：チーフパーサー
- 石田 耀子：ハイジャックの犯人
- 根岸 心：管制官
- 菊川 蓮：乗客 医師
- 望月 爽子：乗客 妊婦
- 波岡 めぐみ：乗客 小学生
- 錦戸 光：事件を担当する刑事
- 江口 草太：少女誘拐殺人事件の犯人
- 上野 副操縦士
- 刑務所所長

朝の空港。搭乗案内のアナウンスと喧騒。  
離発着の様子が見える職員用のバルコニー。  
航空機のエンジン音が響いている。

まどか「ふぁー、いい天気！さあ、今日も頑張りますか」

令奈「やっぱりここにいた。おはようございます、まどか先輩！」

まどか「おはよう、令奈。珍しく早いじゃない？」

令奈「まかせてください、私もCAになって2年目ですからね」

まどか「そうか、令奈もついに先輩か、早いわねー」

令奈「そうなんですよ、まどか先輩、どうにかしてください！」

まどか「どうにかって、どうしようもないでしょ、年をとるのは」

令奈「せめて私が結婚するまで、まどか先輩は結婚しないでください、お願いします！」

まどか「いやよ、だいたい順番逆でしょ？」

令奈「え？もしかしているんですか？相手？」

まどか「え、いや別にいないけど」

令奈「良かったー」

まどか「良かったって、あんたねえ」

パイロットの澄野大吾がやってくる。

澄野「おはよう、今日同じフライトだったかな？」

令奈「わ！一番人気！」

澄野「一番人気？」

令奈「あ、いえ、なんでもありません！おは、おはようございます！」

澄野「(クスッ)おはよう」

まどか「おはようございます、澄野機長。同乗させていただきます。11…3  
0のフランス行きです」

澄野「よろしく頼むよ。君がいると安心だ。お客様のために良いフライトにしよう。じゃ」

まどか「はい、承知しました。失礼します」

令奈「先輩、どういうことですか！？」

まどか「何が？」

令奈「しらばっくれちゃって！君がいると安心だ、ですって！まさか付き合ってるんですか！？」

まどか「は？馬鹿じゃないの：あんたこそ、一番人気ってなんのことよ」

令奈「知らないんですか？澄野機長はですね、女性職員の中で結婚したい男性職員一番なんです。ガッチガチの本命馬、ダントツの人気なんですよ」

まどか「へー」

令奈「へーって、関心ないんですか？」

まどか「別に。あ、もうこんな時間！行くわよ、ブリーフィングが始まっちゃう！」

令奈「つまんないのー、あ、待ってー、まどか先輩！」

◆ a m 9 : 0 0

ブリーフィングルーム。

西沖「おはようございます！」

CAたち「おはようございます！」

遅れてこっそり入ってくる、まどかと令奈。

西沖「鐘白さん」

まどか「はい！」

西沖「今何時？」

まどか「はい・・・えーと、8:56です」

西沖「円堂さん？」

令奈「ひゃい！」

西沖「ブリーフィングは何時開始？」

令奈「9:00・・・開始です・・・あ、だから遅刻はしてませんよね！？」

西沖「鐘白！円堂！」

まどか・令奈「ふあい！」

西沖「遅刻しなければいいわけじゃないのよ。いつも言ってるでしょ？航空の仕事は安全第一、間違いがあつてはいけないのよ。だから常に早め早めに行動して、何度でも点検、確認が出来るように心がけなさいとあれほど口を酸っぱく言ってるのに、自覚が足りない！自覚が！」

まどか・令奈「はい！申し訳ありません！」

西沖「はあく・・・もういいわ、始めましょ。まずは今日のフライト予定と乗務員の確認を」

まどか「やっぱいい、やばい・・・西沖チーフの長い説教タイムが始まるところだったわね」

令奈「最近、さらに恐くなりましたからね、西沖チーフパーサー」

西沖「おい、その二人、聞いているの!？」

まどか・令奈「はい!聞いてます!」

西沖「あんたたちは私と同じ、11..30のフランス行きの便よ。満席の予定だからしつかりね」

令奈「了解しました!お任せください!」

まどか「令奈!ははは・・・頑張ります」

西沖「キツ!」

◆ a m 1 1 .. 1 5

離陸の順番を待つ11..30発フランス行きの機内。

まどか「皆さま、本日は大日本航空フランス・シャルル・ド・ゴール空港行き1130便にご搭乗いただき誠にありがとうございます。当機はまもなく定刻通りに離陸を開始いたします。いま一度、シートベルトをご確認ください。どうぞ、ご到着までごゆつくりとお過ごしください」

令奈「離陸いたします。リクライニングシートをお戻しください。ありがとうございます。ご了承ください。お客様、申し訳ございません、お荷物は前の座席の下にお願い致します。はい、ありがとうございます」

めぐみ「すみません!私のベリーちゃん取ってください」

まどか「ベリーちゃん?」

めぐみ「そう、ベリーちゃん」

まどか「えっと、ベリーちゃんって誰?お姉ちゃんに教えてくれる?」

めぐみ「いいわよ。ベリーちゃんは、おっきなお耳で薔薇の畑に住んでいて、黄色い服を着てピンクの帽子をかぶってて」

まどか「うーん・・・誰かなあ?」

令奈「ウサギですよ、ウサギのぬいぐるみ。さっきチーフが危ないからってハットラックに投げ込んだんですよ。よいしょっと、はいどうぞ」

めぐみ「わー、ありがとうございます、おねえちゃん!寂しくなかった?ベリーちゃん」

令奈「これのどこが危ないんですかね?」

まどか「ありがとうございます、令奈。お嬢ちゃん、お名前は?」

めぐみ「めぐみ!フランスで婆ちやまが待ってるの、うふふふ」

まどか「そうか、困ったことがあったらすぐにお姉ちゃんたちに知らせてね」

めぐみ「はーい」

爽子「可愛いうさぎさんね」

めぐみ「そうでしょ?ありがとうございます、おばちゃん」

爽子「おばちゃん、お腹に赤ちゃんがいるの。生まれたら一緒に遊んでくれる？」  
まどか「女の子？女の子なら私のベリーちゃん貸してあげるわ」

爽子「まあ、ありがとう」  
まどか「うふふふ」

離陸する飛行機。

◆ 12・05

昼食の用意をはじめるCAたち。

まどか「お待たせいたしました。和食と洋食どちらになさいますか？はい、和食ですね。承知いたしました。お客様、和食と洋食」

石田「知らない」

まどか「あ、でも次のお食事までだいぶお時間が」

石田「知らないと言ってるんです」

まどか「・・・わかりました。失礼いたしました・・・お客様、お待たせいたしました」

菊川「じゃあ私は洋食で。この肉、牛肉？」

まどか「はい、松坂牛を使用しています」

菊川「松坂牛！本当かなあ？アメリカ産かオージービーフじゃないの？」

まどか「国産和牛です。お飲み物はどうぞされますか？」

菊川「じゃあ、ビールちょうだい」

まどか「はい、承知しました」

機長のアナウンスが始まる。

澄野「みなさま、こんにちは。機長の澄野です。本日はご搭乗誠にありがとうございます。今日はとてもよく晴れて風もなく、視界もおおむね良好です。当機は33000フィート、約10000メートル上空をおおよそ時速800kmで巡航して参ります。フランス到着までどうぞ楽しい空の旅をお過ごしください。ありがとうございました」

令奈「いい声ですわね」

まどか「そう？」

西沖「ほら、またしゃべってる。早く行きなさい、お客様がお待ちかねよ」

令奈「はい」

まどか「チーフ」

西沖「なに？鐘白さん」

まどか「Kの46にお座りのお客様が、お食事いららないとのことなんです……」  
西沖「何？別に珍しくはないじゃない」

まどか「ええ、ただ何となく……様子がおかしい気がして」

西沖「鐘白さん、お客様を観察するのはいいけど勝手な先入観で判断しちゃう駄目よ。あなたは特に顔に出るんだから、気をつけなさい」

まどか「はぁ……」

西沖「ほら行つて、早く！」

まどか「はい……」

◆ p m 0 … 2 0

機内。

菊川「CAさん、すまないけどワインをくれない？赤でも白でもどっちでもいいから」

まどか「はい、今お持ちします……お待たせいたしました。松坂牛に合う赤ワインをお持ちいたしました」

菊川「こりゃー、一本取られたな(笑)、だけど旨かったよ。たしかに高そうな牛肉だった。産地なんか私には分かりはしないけどね(笑)」

まどか「(笑) フランスにはお仕事ですか？」

菊川「ああ、学会でね。これでもれっきとした医者です。見えないだろ？」

まどか「へー、お医者様なんですか。学会だなんてすごいですね」

菊川「まあな(笑)」

まどか「(笑) ごゆっくり」

石田「すみません」

まどか「はい……何かお持ちしましたでしょうか？お飲み物だけでも」

石田「コックピットに案内してください」

まどか「え？」

起爆装置の付いたスプレー缶を持っている。

菊川「おい、なんだ？……あんた、どうしたんだ？」

石田「聞こえませんでしたか？コックピットに連れて行きなさい」

まどか「キャー！」

菊川「やめろ、何やってるんだ！」

石田「触るな！これを見なさい」

菊川「なんだ、そりゃ？・・・」

石田「神経ガスです」

菊川「神経ガスだと!？」

駆けつける西沖と令奈。

西沖「鐘白さん、どうしたの?・・・お客様、何かご無礼でもございましたか？」

石田「下がってください・・・私の手がこのコックから離れれば、起爆装置が働いて缶は爆発し、神経ガスが機内に散布される。乗客全員、30秒で死に絶えるでしょう。そうなりたくなければ、私の要求に従ってください」

令奈「これって、もしかして・・・ハイジャック!?・・・ああ(倒れる)」

叫び逃げる乗客たち。

まどか「令奈!」

西沖「円堂さん!・・・とにかくお客様、落ち着いてください」

めぐみ「お姉ちゃん、どうしたの?」

まどか「めぐみちゃん、来ちゃダメ!」

石田「私は落ち着いています。要求が通れば全員無事にお返しします。さあ、早くコックピットへ!」

◆ p m 1 .. 0 0

コックピット。インタフォンで話す澄野とまどか。

澄野「何だって!？・・・それで犯人の要求は？」

まどか「まだ何も・・・とにかく機長と話したいと・・・どうしましょう?澄野機長」

澄野「その神経ガスは本物なのか？」

まどか「分かりません・・・」

澄野「ここに入ればこの機は完全に制圧される・・・だがこのまま本当に毒ガスをまかれたりしたら・・・」

まどか「機長・・・」

澄野「わかった・・・入れろ。私が話す。上野副操縦士、操縦を頼む」

上野副操縦士「はい」

コックピットのドアがひらかれハイジャック犯が入ってくる。

澄野「機長の澄野だ」

石田「石田です。賢明な判断、感謝します」

澄野「要求を聞こう。乗客乗員の安全を保障してくれるなら、どんな要求にも応じるよう、社の方にも掛け合おう。だから決して」

石田「誤解しないでください。金銭目的でも、航空会社に対する行為でもありません」

澄野「では目的は」

石田「ともかく、空港に戻ってください」

澄野「空港に？東京空港に戻れと言うのか？」

石田「そうです」

澄野「戻ってどうする？」

石田「あなたは空港上空でこの機を旋回させてください。その後、管制官と話がしたい。その後の事はまた」

澄野「またって、どこへ行くんだ？」

石田「自分の席に。ドアの鍵は開けたまままでお願いします。CAさん、私にも赤ワインを。緊張して喉が乾いてしまいました」

席に戻る石田。遠巻きにおびえる乗客たち。

まどか「赤ワインです」

石田「ありがとう・・・CAさん・・・」

まどか「・・・はい」

石田「・・・お騒がせして申し訳ありません」

まどか「・・・え？」

◆ p m 2 … 3 0

空港上空。

澄野「管制塔。こちら大日本航空フランス行き1130便、当機は・・・ハイジャックされた。繰り返し返す、当機はハイジャックされた」

根岸「こちら東京空港管制室、ハイジャックって・・・本当ですか？」

澄野「ああ、機内に有毒ガスを持ちこんだ犯人によって乗っ取られた。今のところ乗客乗員は無事だ。犯人の指示は東京空港の上空で旋回し、管制塔と連絡を取る。要求はその後にすることだ。あなたは？」

根岸「管制官の根岸です。犯人はどこに？」

澄野「客室だ」

根岸「犯人はグループですか？」

澄野 「いや、単独犯の様だ。あ……」

犯人の石田がコックピットに来ている。

石田 「管制塔ですか？石田と言います」

根岸 「……あなたがハイジャックを？」

石田 「ええ、先ほどから。今から要求を言いますから、良く聞いてください。無期懲役で服役中の江口草太を釈放しなさい」

根岸 「え？なんですって？」

石田 「もう一度だけ言います。無期懲役で服役中の江口草太を釈放しなさい」

根岸 「ちよつと待ってください！私にそんな話をされても……」

石田 「警察が到着したら伝えてください。この飛行機は燃料が尽きるまで東京上空を旋回します。墜落する前に江口を釈放して引き渡せば、乗客乗員は無事にお返しします」

根岸 「墜落って……犯人の釈放なんて、きっとそんなに簡単には」

石田 「この飛行機はフランスのシャルル・ド・ゴール空港行きですよ。どれくらいの時間、飛行できるんですか？」

根岸 「え……おそらく20時間弱です」

石田 「すでに離陸して3時間。残りは17時間。十分でしょう。警察が到着したら連絡をください。あなた、お名前は？」

根岸 「……根岸です」

石田 「根岸さん。乗客の命はあなたにかかっています。よろしくお願いします」

根岸 「あ、ちよつと！」

澄野 「目的は何なんだ？江口草太っていうのは何者だ？おい！」

石田 「あなたはこの飛行機が無事に着陸できるように操縦に専念してくれば結構です。あとは警察とお話しします。では私は席に戻ります」

澄野 「……気味の悪い奴だ……」

めぐみの席近く。

爽子 「うう……」

めぐみ 「おばちゃん？どうしたの？お腹痛いの？」

菊川 「どうしたんですか？どこか具合でも？」

爽子 「すみません、急におなか……」

めぐみ 「おばちゃんね、おなかに赤ちゃんがいるの。大丈夫、おばちゃん？」

菊川 「それはいけない。私は医者です、少しお腹触りますよ」

爽子 「ああ……助けて……赤ちゃんを……どうか、お願い……」

菊川「とにかく床に横になりました。CAさん！CAさん！」  
まどか「どうかしましたか？あ、お客様、大丈夫ですか！？」

菊川「妊娠中らしいんですが・・・いけない、破水してるぞ！」  
爽子「来月・・・予定日なんです・・・」

菊川「切迫早産かもしれない・・・ビジネスクラスに運ぼう。あっちならフラットシートに出来るでしょう？」

まどか「はい！令奈！ビジネスクラスに行ってお席を譲ってもらってきて」  
令奈「はい！」

石田「どうしました？」

まどか「あの・・・妊娠されてる女性が急にひどい腹痛に見舞われたようで・・・  
今からビジネスクラスに移動させます。構いませんね？」

石田「・・・わかりました。いいでしょう」

まどか「ありがとうございます・・・では、お願いします、えつと」

菊川「菊川です。必ず助けましょう、赤ちゃんもお母さんも」  
まどか「はい！」

◆ p m 3 ・ 0 0

管制塔。管制室。どかどか入ってくる警察関係者。

錦戸「お待たせしました、空港警察の錦戸です。ここからは私が指揮をとらせていただきますのでご安心ください。それで犯人の要求は」

根岸「それが・・・無期懲役で服役中の江口草太という人物を釈放しろと」

錦戸「江口草太？どこかで聞いたことあるな・・・あ！先月、判決が下った少女誘拐殺人の犯人だ！どうしてハイジャック犯が江口の釈放を・・・仲間なのか？やつを助け出そうとして・・・」

根岸「それより、どうしたらいいんですか？われわれは一刻も早く飛行機を無事に着陸させたい。そのためなら、犯人の釈放でもなんでもしてください！お願いします！刑事さん！」

錦戸「ちよつと待て、待て！こっちだつて乗客乗員、全員を無事に助けたい。だが服役囚の釈放となると、そう簡単には行きませんよ・・・法務大臣、いや総理大臣の判断を待たなければいけないかもしれない。とにかく、法務省にはすでに連絡を取っています。それで飛行機はどのくらい飛ばし続けられるんですか？」

根岸「おおよそあと17時間弱・・・」

錦戸「今からだと・・・朝の8時までか・・・」

石田「警察は到着しましたか？」

根岸「・・・来ました」

石田「では出してください」

錦戸「・・・空港警察の錦戸だ」

石田「はじめまして。石田と言います。よろしく願います」

錦戸「目的は何だ！？金なら用意する。いくらだ？1億か？10億か？」

石田「時間稼ぎは止めてください。時間の無駄です。根岸さんから聞いていませんか？目的は金じゃない。江口草太の釈放です」

錦戸「やつの仲間か？それとも家族か？いずれにしても江口草太は罪を犯したから無期懲役の判決が下ったんだ。それも少女を誘拐してもあそび殺した極悪犯だぞ？今さら助けて何になる？罪を償わせるべきじゃないのか？」

石田「そう、その通りです。江口は罪を償うべきだ。だが法の裁きじゃない。私がこの手で奴を裁く。無期懲役？心神耗弱状態だって？ふざけるな！・・・いいですか？江口を釈放し、私の目の前に連れて来てください。さもないと機内で神経ガスをばらまく。機内にいる全員、30秒足らずで死ぬでしょう」

錦戸「・・・少し待ってくれ。今、上にも聞いている。回答までまだ少し時間がかかる」

石田「いいですよ。待っています。この飛行機が飛び続けている間はね。ただし」

錦戸「ただし、なんだ？」

石田「機内に妊娠中の女性がいます。その女性が先程から激しい腹痛を訴えて苦しんでいます。早くしないと母子ともに命を失うかもしれない」

錦戸「なんだって!？」

石田「だから言ったでしょう？時間の無駄は止めてくださいと。私の要求は伝えました。いい返事を待っています、錦戸さん。では」

根岸「切れた・・・」

錦戸「くそっ!・・・自分の手で裁くと・・・おい、大至急、江口に恨みを持つ人物を洗い出せ！」

刑事たち「はい！」

刑務所。 所長室。

所長「おい、江口・・・どういことだ、これは？」

江口「知りませんよ。だけど本当に釈放してくれるんですか？」

所長「まだ分かん。だがそうなったとしても、自由になれるわけじゃない。勘違いするなよ！」

江口「くっくくくくく・・・だけど誰なんでしょうね？僕を釈放してくれる奴って。昔の彼女かな。エミコにユキナにマドカ、まさかお袋じゃないよね？あ、あいつは死んだんだった！いけない、間違えた！（大笑）」

所長「貴様って男は・・・」

登場人物

安村千夏…保育園の職員

後藤涼子…誘拐事件専門ネゴシエーターの警察官

常盤真由美…誘拐された少女・渚の母

笹生耕哉…事件の担当刑事

◆ p m 4 … 0 0  
管制塔。

根岸「あの・・・江口草太の事件って、もしかして、あの渚ちゃん誘拐事件で  
すか？」

錦戸「ああ、そうだ。まったくひどい事件だった・・・」

・・・回想・・・

1年前。

常盤家。誘拐された少女・渚ちゃんの家。

電話の音が鳴り響く。

笹生「待って。逆探知いいか？」

後藤「はい、OKです。お母さん、出てください」

真由美「(受話器を取る)・・・はい、常盤です・・・」

江口(電話の声)「もしもし、お母さんですか？」

真由美「はい！渚は、渚は無事なんですか！？」

江口「無事ですよ。きっと警察には知らせたんでしょうね？」

真由美「・・・いいえ、警察には言ってません」

江口「嘘つかないでよ。そうじゃなきゃ、そんなに落ち着いてやしないでしょ？  
警察の方、そこにいるんでしょ？お話しませんか？出来れば女性がいいな」

真由美「・・・(受話器を押さえ)どうしまししょう？」

笹生「・・・後藤、話せ」

後藤「はい・・・もしもし、電話、変わりました。警察です」

江口「これはこれは、素敵な声だ。やっぱりいるじゃない。あなたお名前は？」

後藤「・・・後藤です」

江口「後藤さんか。下の名前は？」

後藤「・・・涼子です」

江口「いい名前だ。よろしくね、涼子ちゃん」

後藤「渚ちゃんは無事なの？要求を言って。小さな女の子をこんな目にあわせ

て恥ずかしくないの？お金なら用意するわ。だから早く」

江口「お金なんかいらさないよ。これはゲームだ」

後藤「ゲーム？・・・じゃあどうすれば彼女を開放してくれるの？」

真由美「(受話器を奪い)お願い、娘を返して！あの子はぜんそくの持病があるの、クスリが無いとひどく苦しむのよ！だから、だからお願い・・・声を聞かせて！いるんでしょ？そこに・・・ああ・・・渚・・・可哀そうに・・・この人で無し！返しなさい！娘を返して！(号泣)」

江口「(大笑) ははははははは！これが聞きたかったんだ！哀しみと絶望でもだえ苦しむ人間の声がさ！いいよ、返してあげる」

後藤「いつ？どこ？」

江口「横浜の本牧ふ頭。D倉庫の駐車場に真っ赤な軽自動車が止めてある。彼女はその車の中だ」

笹生「(無線に) 横浜本牧のD倉庫、急行しろ」

江口「待ってるよ、涼子ちゃん」

・・・

根岸「それで、どうなったんですか？」

錦戸「ああ・・・少女は犯人の言った通り車の中にいた。だがすでに殺された後だった。しかも驚いたことに、犯人の江口も一緒にいたんだよ、車の中に」

根岸「なんですって！？・・・どういうことですか？」

錦戸「さあな・・・江口は現行犯逮捕されたが、裁判では心神耗弱の鑑定結果が認められて極刑にはならなかった。裁判官が死刑廃止論者だったのも影響したのか、無期懲役の判決で現在服役中だ」

根岸「じゃあ、ハイジャック犯の石田は、その事件になんらかの関係があつて江口草太を憎んでいるんですかね？」

錦戸「分かん・・・」

錦戸の携帯電話が鳴り、電話に出る。

錦戸「はい、錦戸・・・うん、うん、なんだって？・・・そうか、わかった。

じゃあお前は、石田の交友関係を洗え。そうだ、頼んだぞ」

根岸「どうしました？」

錦戸「ああ、搭乗名簿から石田を洗った。本名だった、石田燿子、31才、薬剤の研究室に務めているらしい」

根岸「それで神経ガスの知識が」

錦戸「何としても止めなくては。江口草太の犠牲者はもういらぬ」

根岸「ひどい事件ですね・・・」

錦戸「まったく。おっと、また電話だ・・・おう、お前か。ずいぶん早耳だな。ああ、そうだ、あの江口だよ。大丈夫なのか、そんな真似して・・・ああ、わかった。そういうことなら、よろしく頼む。じゃ」

根岸「何か進展でも？」

錦戸「いや、俺の警察学校時代の後輩で、例の事件の担当だった男だ。江口の件をどこからか聞いたらしい。居ても立ってもいられず乗り出してきた、ははは」

根岸「大丈夫なんですか？そんなことして」

錦戸「ああ、警視総監のお墨付きの様だ。担当刑事なら事件解決に一肌脱げるだろうってな」

根岸「警視総監！？そりやすごいな」

錦戸「上も威信がかかっているからな。本気モードだ」

ひなた保育園。

子供たちの遊ぶ笑い声が響いている。

千夏「貴ちゃん、そんなところ登ったらあぶないわよ！あ、ほら、気を付けて！ふー、もう降りなさい」

笹生「すみません、あのちよつとお話いいですか？」

千夏「紗江ちゃん、チーちゃんにも貸してあげて、そう、いい子ね」

笹生「あの！」

千夏「え？・・・あ、失礼しました、どちら様ですか？」

笹生「私、警視庁の笹生と言います。少しでもお話を聞かせてもらえますか？」

保育園の応接室。

冷たい麦茶が運ばれてくる。

千夏「どうぞ」

笹生「すみません、お構いなく。しかし子供は元気ですね、こんな暑さなんて屁でもないんだな」

千夏「本当に。目一杯まで遊んだら、コトツとお昼寝しちゃうので羨ましいです」

笹生「ははは、大人はそうはいきませんものね」

千夏「それで警察が、どういったご用件で？」

笹生「はい、実は・・・江口草太をご存知ですよ？」

千夏「・・・はい・・・忘れてくても忘れられません・・・あんなむごい事件

を起こした犯人・・・到底、忘れようがありません・・・だけどたしか、実刑判決を受けて服役中のはずじゃ」

笹生「ええ、奴は今は檻の中です。私はあの事件を担当していました」

千夏「そうなんですか・・・」

笹生「私は渚ちゃんを助け出すことが出来なかった。その事を今でも悔いています。しかしその犯人が、事もあるうに釈放されそうなんです」

千夏「え？どういうことですか？」

1130便。ファーストクラス。

お腹の痛みに苦しむ爽子。

爽子「うーん・・・う、いた・・・助けて・・・ああ、赤ちゃんが・・・」

菊池「大丈夫ですよ、気を確かにもって」

令奈「お医者様のくせにそんなことしか言えないんですか!？」

菊池「仕方がないだろう!? 専門外なんだから」

西沖「円堂さん! 失礼いたしました、お客様、でもどうか頑張ってください、先生だけが頼りです!」

菊池「はあ、最善はつくしますよ。だがな、おそらく赤ん坊の心拍も徐々に落ちていくだろうからな」

爽子「先生! 何とかして! 私はどうなってもいから、お願い! 赤ちゃんを、赤ちゃんを助けて!・・・う、痛い!」

めぐみ「おばちゃん、がんばって!」

令奈「あ、めぐみちゃん、お席にいなくちや駄目よ」

まどか「(探しながらこちらに来る)めぐみちゃん! どこ!? どこにいるの!?? あ、ここにいたの、良かった・・・めぐみちゃん、一人でどこか行っちゃ駄目よ、お席でアニメでも見ましょう。ね?」

めぐみ「いや! おばちゃんのそばにいる!」

まどか「めぐみちゃん・・・」

めぐみ「おばちゃん、ベリーちゃんを可愛いって言うてくれたんだもん。だからめぐみ、おばちゃんのそばにいる! ベリーちゃんと一緒にそばにいる!」

石田「そうね、そばにいてあげてね」

めぐみ「あ・・・」

石田「おばちゃん、頑張ってるから、あなたがそばで励ましてあげてね。お腹の赤ちゃんにも、頑張れー、頑張れーって。ね?」

めぐみ「・・・おばちゃん・・・死んじゃうの?」

石田「死んだりしないわよ。元気な赤ちゃん産むために頑張ってるの」

まどか「だったら!」

石田「……」

まどか「だったら、この飛行機を着陸させてください。このままじゃ母体も赤ちゃんの命も危なくなります。あなたがどういう目的でこんな事をしているのかは分かりませんが、どうか……どうか、この機を、空港に戻させてください！（土下座する）お願いします！この通りです！」

令奈「あ……（土下座する）お願いします！」

西沖「……私からもお願いします。どうか機体を東京空港へ（膝をつく）」

まどか・令奈・西沖「お願いします！」

石田「……駄目です」

まどか「！」

菊池「……」

石田「機長に伝えてください。予定を変更し、八丈島に向かいます」

菊池「八丈島！？」

ひなた保育園の応接室。

笹生「つまり、ハイジャック犯の石田燿子は、渚ちゃんの母親以上に犯人の江口を恨んでいるんです。何か心当たりはありませんか？小さなことでもいい、何か思い当たることはありませんか？」

千夏「……渚ちゃんのお母様には」

笹生「やはり事件の担当だった女性の刑事が、お会いして話を聞いているはずです。石田燿子という人物を知らないか確認しています」

千夏「石田……燿子……」

笹生「何か思い出しましたか！？」

千夏「ちよつと待っててください……たしか」

何かを探しに立つ千夏。

千夏「これ」

笹生「なんですか？……ハガキ？」

千夏「はい。うちの保育園では子供たちとご近所の方や、遠くに住むおばあちゃんやおじいちゃんなどと文通をしてるんです。誰が誰にといいわけではなく、みんなで回し読みして。年賀状や暑中見舞い、クリスマスカードなんかが届くと、それは子供達よりこんで見えています。その中にたしか……あつた、これだわ。ほら、石田燿子さん、この何年か、必ず毎回送っていたいで……だけどあの事件以来ぱったり……」

笹生「なぜ、石田燿子はハガキを送っていたんでしょう？」

千夏「わかりません・・・」  
笹生「元氣ですか？いつか一緒に遊べたらいいですね。いつでもあなたを見守っています・・・石田耀子」

千夏「誰に向けて書いたんでしようか？・・・渚ちゃんになんですか？」  
笹生「わかりません・・・」

◆ p m 8 ・ 0 0

東京空港管制室。

錦戸「わけがわからん！どうしていきなり八丈島なんだ！？何があった？どういう事だ？コケにしやがって、まったく・・・」

根岸「そう熱くならないでください、とにかく身重の母親は降ろせるんですから。一步前進」

錦戸「八丈島じゃ、パトカー2, 3台が関の山か。くそ、頭の切れる女だ」

根岸「今はとにかく、パトカーより救急車と病院でしょう、手配は済んでますよね？」

錦戸「ああ、問題ない。町立病院がスタンバイして待っている」

根岸「頼むぞー、無事に生まれてくれよー」

八丈島上空。コックピット。

澄野「八丈島空港、こちら、1130便。緊急着陸を許可されたい。こちら1130便」

空港管制官「こちら八丈島空港、1130便、着陸を許可する」

澄野「よし、行こう。母親と赤ん坊を助けるんだ」

救急車のサイレンの音。

離陸した上空の機内。

まどか「ありがとうございました。でもどうして助けてくれたんですか？」

石田「どうして？私は別に、関係のない誰かを傷付けようとは思っていないから」

まどか「子供が・・・」

石田「え？」

まどか「子供が好きなんですわね」

石田「・・・あなたには関係ない」

まどか「さつきもめぐみちゃんに優しくかった。それなのにどうして」

石田「その可愛い子供の命をいとも簡単に奪った男がいるのよ。それなのにこのうと生きながらえている。許せる？法が裁かないなら、私が裁くだけ。この手で決着を着けるだけよ」

まどか「その男って・・・誰の命を奪ったんですか？」

石田「・・・いいわ、教えてあげる。あいつは、私の命より大事な娘の命を奪ったのよ！」

まどか「なんですって・・・」

常盤家応接室。

後藤「では、亡くなった渚さんは捨て子だったんですね？」

真由美「はい・・・ある冬の日の夜、玄関のベルが鳴ったので出てみると、小さな赤ん坊がかごに入って置き去りにされていました」

後藤「それが渚さん？」

真由美「・・・はい」

後藤「でも戸籍上は」

真由美「長い間子供が出来なかった私たち夫婦は、そのままの子を実子として届けました」

後藤「そうだったんですね・・・渚さんはもちろん」

真由美「ええ、何も知りませんでした。言うつもりもありませんでした、大きくなっても。それなのに・・・(泣)」

後藤「話していただいてありがとうございます。(携帯が鳴り電話に出る)あ、ちよつと失礼します・・・はい、後藤です。ええ、渚ちゃんの家よ。それでそっちは？・・・なんですって！？・・・分かったわ、またあとで。ええ、それじゃ」

真由美「渚・・・ごめんね・・・ママが守ってあげられたら・・・(泣)」

後藤「お母さん・・・おそらく・・・ハイジャック犯が誰なのか、分かりました」

真由美「え？犯人の江口の釈放を要求しているっていうハイジャック犯？・・・いったい誰なんですか？」

後藤「渚ちゃんの・・・本当の母親です」

真由美「え？・・・渚の本当の母親・・・その人がどうしてハイジャックなんか」

後藤「おそらく彼女は子供を捨てた後も未練を断ち切れず、遠くから渚ちゃんを見守り続けていたんでしょう。そうしてあの事件が起きてしまった・・・その恨みを晴らすために彼女は・・・すみません、私、空港に行かなくてはならないので。また何かあったらご連絡します。では、失礼します」

真由美「待つてください！・・・私も連れて行ってください」

後藤「え？でも・・・」

真由美「お願いします！その女性に会ってみたい、いいえ、話だけでも・・・話して馬鹿なことはやめてもらわなければ」

後藤「・・・わかりました。行きましょう」

真由美「ありがとうございます」

後藤「だけど常盤さん、あくまでも私に従ってください。いいですね」

真由美「はい」

空港へ向かう車の中。

後藤「まさかハイジャック犯が渚ちゃんの生みの親だったなんて・・・」

笹生「江口は一人ならず、二人もの母親を苦しめたんだ・・・死ぬほどな」

後藤「だけど裁くのは私たちがじゃない・・・裁くのは」

笹生「おい、あれ！」

後藤「ええ、1130便・・・」

響き渡る、飛行機のジェット音。

◆ p m 1 1 … 3 0

東京空港管制室。

常盤真由美を連れて到着する笹生と後藤。

笹生「錦戸さん」

錦戸「おう、笹生！来たな、よろしく頼むぞ」

笹生「はい。あ、こっちは」

後藤「警視庁捜査2課の後藤です」

錦戸「ああ、噂は聞いているよ。どんな誘拐事件でも解決しちゃう、敏腕女ネゴシエーターだったね」

後藤「いえ、噂の独り歩きです」

錦戸「ほー、謙遜と来た、いいね、何だお前ら、出来てんのか？」

笹生「何でそうなるんですか、まったく相変わらずですね。それよりどうなんですか？状況は」

錦戸「それがどうやら夜中に着陸する気はないようだ。夜目に乗じて突入されるのを警戒してるんだろ」

後藤「朝までこのまま飛び続ける気ですかね？」

錦戸「おそろくな」

根岸「管制官の根岸です」

笹生「どうも」

根岸「燃料は朝まで持ちますが、乗客乗員の体力が心配です」

笹生「そうですね。過度のストレスと緊張でおかしな自体にならない方がいいが」

根岸「でも機長の報告では、機内は何となく落ち着いているようですよ」

後藤「人質と犯人はまれに、共感し合い、信頼関係が生まれることがあるんです。ストックホルム症候群と言われるものです」

錦戸「ストックホルム症候群？」

後藤「ええ。長時間、共に過ごすことにより、連帯感や好意的感情が生まれる。

1973年にストックホルムで起きた人質事件からそう呼ばれています」

笹生「連帯感や好意的感情か・・・」

機内。

令奈「もー、怒った！私がガツンと言ってやる！もう限界！今夜は毎週楽しみにしてるドラマの最終回だったんですよ！」

まどか「落ち着きなさいよ、令奈！だいたいテレビなんてフランスで見れないじゃない」

令奈「テレビじゃないですよ、まどか先輩遅れてるー！ネットドラマ！配信日だったからパリのホテルでゆっくり見ようと思ってたのにー！」

まどか「そんなに見たいなら見ればいいじゃない」

令奈「どこで？」

まどか「ここで」

令奈「それはさすがにやばくないですか？」

まどか「いいわよ、少しくらい。多分朝までこのままだもの」

西沖「(咳払い)」

令奈「やばっ」

まどか「しまってますよ！」

西沖「・・・私も見る」

まどか・令奈「えー！？」

まどか「どういうつもりなんですかね？あの石田って人」

令奈「毒ガス持ってるって言うてるけど、あれ以来、ボーと座ったまんまで、八丈島飛び立って以来、乗客も諦めて寝たり映画観たり、普通の機内になっちゃってますもんね」

まどか「西沖チーフ」

西沖「なに？まどか」

まどか「あの人、子供の命を奪った男を、自分の手で裁くって言ってたんです」

西沖「自分の手で裁く？どうやって？」

まどか「それはわかりませんが、なんだかあの人、とても悲しい目をしてました」

西沖「そう・・・」

令奈「恨みでも晴らす気なんですかね、巻き添え食ってこっちはいい迷惑ですよ」

西沖「迷惑ぐらいで済めばいいけれど・・・」

澄野「チーフ」

西沖「あ、機長」

澄野「彼女を呼んできてくれ」

石田「めぐみちゃんはお母さん好き？」

めぐみ「好きだよ、だってお母さんだもん」

石田「そうか、お母さんだもんね。おばちゃん、めぐみちゃんのお母さんが羨ましいな」

めぐみ「どうして？」

石田「だって、こんなかわいいめぐみちゃんが子供なのよ」

めぐみ「ありがとう、じゃあおばちゃん、わたしの家に遊びに来れば、ママとも遊べるわよ。来る？」

石田「行きたいけど、行けないかもな」

めぐみ「えー！どうしてー？」

石田「どうしてかなー？」

西沖「石田さん、コックピットで機長が呼びです」

コックピット。

石田「何か用ですか？」

澄野「管制塔に、あなたと話したいと言う人が来ているそうだ。話してみるか？」

石田「・・・いいでしょう」

澄野「管制塔、機長の澄野だ。話をするそうだ」

根岸「了解しました。・・・こちらへどうぞ」

真由美「・・・あの・・・こんばんは」

石田「・・・こんばんは・・・どなた？」

真由美「渚の・・・常盤渚の母です」

石田「え！？・・・どうしてこんなところに・・・」

真由美「夕方、刑事さんから聞かされました・・・あなた・・・渚の本当のお母さんなんですね？」

石田「・・・・・・・・・・」

真由美「・・・ごめんなさい・・・私がついていながらあんなことに・・・許してください・・・」

石田「・・・私の方こそ・・・冬のあの日、赤ん坊を連れて死のうと思って歩き続けていました。ふとあなたの家の玄関の電気がついて、思わず赤ん坊を置き去りにしてしまった・・・あなたの家にどれだけ迷惑をかけるかも考えず・・・本当に申し訳ありませんでした・・・」

真由美「迷惑だなんて・・・だけどうして？」

石田「・・・私は妻子のある人を愛してしまい、一人で子供を産みました。でもその直後、乳癌と診断され余命半年と言われたんです」

真由美「まあ・・・」

石田「私は親がおらず孤児院で育ちました・・・それでも援助を受けて何とか薬科大に通い勉強中の身でした・・・それなのに出産と病気でどうしていいかわからず・・・あの子を捨てたんです。私はあの子を自分と同じ境遇にしてしまったんです・・・」

真由美「そうだったんですね・・・私は長い間子供が出来なくて、あの子が家に来た時、ああ、この子は私の子供だ、何があっても私がこの手で育てよう、守って行こうって決めたんです・・・それなのに・・・いつかは本当のお母さんに会う日が来るかもしれない、そう思っていたのに会わせてあげることが叶わなかった」

石田「常盤さん・・・あの子の本当のお母さんは、あなたです。私じゃありません。私はあの子を捨てたんです。母親を名乗る資格なんかありません・・・その後、手術を受け乳房を全摘出しました・・・再発もなく生き続けていたら、どうしてもあの子に会いたくなって・・・ある日、幼稚園に向かうあなたたち親子の後をつけてしまいました・・・忘れることが出来なかった・・・断ち切ることが出来なかったんです」

真由美「・・・渚は明るくて優しい子でした・・・許せませんよね・・・許せるもんですか・・・」

管制室。錦戸の携帯が鳴る。

錦戸「(電話に出る) はい、錦戸・・・そうか、わかった」

笹生「何かありましたか？」

錦戸「政府が江口の釈放を許可した。明朝7時、ここに連行されてくる。犯人の出方はまだ不明だが、乗客乗員の安全、それから・・・江口の生命は何とし

でも守れ。いいな」  
警官たち「はい！」

◆ a m 7 .. 0 0

管制室。

後藤「朝になりましたね」

笹生「いよいよか」

警官「江口草太、連行しました」

錦戸「来たか」

部屋に入ってくる江口。

江口「えー、管制塔ってこんな感じかあ、ゲーセンみたいだな。これ押してい  
い？」

根岸「あ、それは！」

錦戸「江口！ふざけるんじゃない。務所から出て来たと言っても無罪放免にな  
ったわけじゃないんだからな、勘違いするな」

江口「あんた誰？まあいいや。でも顔は覚えた。いつかぶつ殺す！ひやははは」  
笹生「貴様・・・」

後藤「待つて。江口草太、あなたをここに連れてきたのは、ハイジャック犯の  
要求があなたの釈放だったからよ」

江口「知るか。どうだっていいよ、そんな話」

後藤「見なさい。あの1130便をハイジャックしているのは、あなたが殺し  
た渚ちゃんのお母さんよ」

江口「お母さん？ふん、俺に恨みでも晴らそうってのかよ。そのためにハイジ  
ャック？馬鹿じゃねえの？飛行機の上から何しようってんだよ」

澄野「（無線から）機長の澄野だ。これから着陸する。燃料も限界だ」

石田「石田です。江口は到着しましたか」

錦戸「ああ、ここにいる」

石田「では、16番ゲートに連れて来てください。機体もそこにつけます。決  
して搭乗口より中に入らないように。そこからは無線で指示します。いいです  
ね？」

錦戸「わかった」

飛行機が着陸する。  
機内。

まどか「石田さん、どうするつもりですか？」

石田「安心して。あなたたちの安全は保障します」

まどか「でも」

石田「無線機をください」

まどか「・・・死ぬ気なんですか？」

石田「・・・ハイジャック犯の心配なんてしなくていいのよ」

まどか「乗員乗客全員の命を守るのが私の仕事です！・・・お願いです、もうやめて」

石田「・・・ごめんなさい、止めるわけにはいかないの。無線をちようだい」

まどか「・・・(無線を渡す)」

石田「ありがとう」

まどか「・・・」

石田「石田です、聞こえますか？」

搭乗口外。

錦戸「ああ、聞こえてる。どうする気だ？」

石田「これからハッチを開けます。江口一人でボーディングブリッジを通って機内に来させてください。その後、緊急脱出シユートで乗客を降ろします」

錦戸「駄目だ！人質の開放が先だ！」

石田「忘れたんですか？私がこの手を放したら起爆装置が働き容器の中の神経ガスが機内にばらまかれ30秒足らずで全員死にます」

錦戸「・・・わかった。江口を一人で行かせる。そうしたら人質を解放するんだな？」

石田「ええ、約束します」

錦戸「よし・・・行かせる」

一人で機内へ向かう江口。

機内へ入る江口。

石田「CAさん、ハッチを閉めて」

まどか「石田さん！」

石田「早く！それから脱出用シユートで全員機外へ出て。急いで！」

まどか「・・・わかりました・・・みなさん、機内中央にお集まりください。

令奈、いい？」

令奈「はい、まどか先輩！準備OKです」

西沖「それではみなさん、小さなお子様をお連れの方、ご年配のお客様、その後は女性、男性の順でお降り下さい。手は頭の上へ上げて下さい」

ざわつく機内。

石田「私たちはこっちよ」

澄野「コックピットで何をする気だ？」

石田「機長も外へ出て下さい」

澄野「しかし」

石田「機長！……ここまでありがとうございます。さ、入って」

江口を連れてコックピットに入る石田。

鍵を閉める音。

コックピット内。

石田「ここなら邪魔されない……これで終わりよ。あの子の人生を狂わせ、あの子を苦しめた私とあなたは、一緒にここで死ぬのよ」

笹生「……いいですよ、石田さん」

石田「は！……誰！？……江口じゃない……そんな……そんな！？」

笹生「私は渚ちゃんの事件の担当刑事だった笹生と言います……彼女を助けられなかった私も同罪です。だから私を殺してもかまいませんよ。だけど、そんなことをして渚ちゃんは喜ぶんでしょうか？いつか天国で再開した時、笑って話が出来ますか？天国の鐘を一緒に鳴らせますか？……もうやめましょう……あなたの気持ちは十分、渚ちゃんに届いたはずですよ。渚ちゃんの手で、命を全うしてください。お願いします」

石田「……う……うあー！（泣）……」

笹生に連行されて出て来る石田。

笹生「……石田燿子、逮捕しました」

錦戸「ご苦労だった」

江口「ははっー！お前か俺を狙った馬鹿なハイジャック犯は？」

錦戸「黙れ！連れてけ！」

江口「出てきたらまたやってやる！また必ずな！わはははははは！」

すると突然、ナイフを持って走り出す真由美。

真由美「ひー!!」

江口の背中を一突きにする。

江口「んぐっ……てめえ、何すんだ!？がはっ!ぐもっ……があ(倒れる)」

後藤「江口!(駆け寄る)……江口が刺された!救護班!救護班急いで!……常盤さん!？」

包丁を落とし、ひざまずく真由美。

真由美「……許せるはずがない……許せるはずが……」

騒然とする現場。

◆ a m 1 1 … 0 0

滑走路が見える空港のバルコニー。

後藤「事件発生から24時間経ちましたね」

笹生「お疲れ様でした。長い一日でしたね」

錦戸「ああ……江口のやつ、一命は取り留めたが……出来るもんなら俺が殺してやりたいくらいだ」

笹生「それは言わんでくださいよ。錦戸先輩」

錦戸「すまんすまん、口が滑った」

後藤「悲しい事件が起きるたび、無力だなんて思い知ります」

錦戸「だが、俺たちがあきらめたらそれこそ本当の終わりだ。やるつきやねえよ」

笹生「やるつきやねえか……」

後藤「そうですね……やるつきやねえか!よし、帰って寝ます!」

錦戸「ははは、じゃあな」

笹生「俺も。先輩、お先に失礼します」

錦戸「おう!……お前ら本当に……ま、いいか」

飛行機の音が響いている。